



# 文教大学の授業

文教大学教育研究所  
埼玉県越谷市南荻島3337  
TEL 048-974-8811 フax 343-8511



## 映像メディアで活躍する人材を育てる映像表現教育

～「ゼミナールⅠ～Ⅳ」と「映像表現Ⅰ～Ⅱ」～

情報学部 竹林 紀雄



2001年4月、民放キー局のテレビ番組の演出、プロデューサーをつとめながら、東京造形大の映像表現系ゼミナールの非常勤講師から大学教員としてのキャリアをスタートする。2007年4月、文教大学に着任。その後も、『ザ・ノンフィクション』(フジテレビ)等、ドキュメンタリー番組の演出やプロデュースといった表現活動を行う一方で、FSNドキュメンタリービッグ賞や山形国際ドキュメンタリー映画祭などの選考もつとめる。現在、日本映画監督協会理事、湘南総合研究所長。第12回ATP賞(特別賞)等を受賞。立教大学大学院修士課程修了。

(たけばやし のりお)

現在、映像はテレビや映画といったマスメディアはもちろん、Webを経由したソーシャルメディアでも活用され、さらに、ライブ・ビューイングや街角の広告等、さまざまな領域に広がっている。映像メディア業界を取り巻く環境が大きく変化するなかで、次代の映像メディアを支える表現者を育成することを目標に、私が取り組んでいる映像表現教育を紹介する。

### 1. 変容する映像メディアに対応した映像表現教育を拓く

5G、ストーリーミングプラットフォーム、8K等、技術の進化に伴い映像メディアを支えるテクノロジーは大きく変化し、テレビ、映画、インターネットなど映像メディア業界を取り巻く環境は大きく変化している。このようななかで、映像業界と連携し、次代の映像メディアを支える人材育成を視野に入れた映像表現教育に取り組んでいる。具体的には、様々なジャンルの独創的な映像作品を鑑賞し、映像表現への理解を深めると共に、映像作品の制作に取り組むことで、履修学生の独創的な映像表現力を涵養し、卒業後の活躍につなげたいと考えている。

「ゼミナールⅠ～Ⅳ」、「映像表現Ⅰ～Ⅱ」共に、課題作品の制作に臨むにあたって履修学生に求めるのは、これを課題として捉えるのではなく、対外的にも「作品」として主張で

きるものを手掛ける姿勢をもつことだ。選抜された学生映像作品は、国内の映像表現教育の先進校が集う「インターリンク学生映像作品展」等、積極的に学外で発表を行っている。

### 2. 独創性を養う映像表現教育

さて、竹林ゼミが目的として掲げているのは以下の3つである。

1. 映像作品の「鑑賞」と「制作」により、映像表現への理解を深め、映像メディアで活躍できる人材を育成する。
2. ゼミでの教育や活動を通して、メディアリテラシーを身につける。
3. どのような業界に就職しても活用できるコミュニケーション能力を習得する。

コロナ禍の今年のみは、教育活動に制限があるが、以上の目的達成のため、様々な課外活動を通して、表現者を目指す者としての意識を高めると共に、在京テレビ局、映像系プロダクションと連携し、テレビ・映像分野全

般的プロフェッショナル育成に主軸をおいた映像表現教育に取り組んでいる。

例年は、ゼミの課外活動として、日本テレビやフジテレビ等で行うテレビ局研修に取り組んでいる。テレビ局内の様々な放送施設を見学し、局内のスタジオやサブルームで生放送番組を体感する研修を行っている。また、ゼミ生全員参加で合宿形式の研修も行っている。毎年、3泊前後で国際的な映画祭などへ参加し、世界を舞台に活躍する映像の表現者と交流する。この他にも、主に都内での映像作品の鑑賞や映像フェスティバルへの参加、またテレビ業界や映画業界の第一線で活躍する方々によるレクチャーや交流。このような交流で得た知見やネットワークは、ゼミ生の就活にも活用されている。

このような竹林ゼミの教育の基盤となっているのが、メディア表現学科の専門科目、「映像表現Ⅰ～Ⅱ」(3セメ、4セメ)である。この科目で、映像メディアに共通する表現の基本セオリーを学び、理解した上で、ゼミナールに入るからこそ、独創的な映像表現に挑むことが出来るのだ。

### 3. プロフェッショナルとして活躍する卒業生

文教大学でゼミナールを担当して14年が過ぎた。毎年、ゼミ生の大半が、テレビ業界を中心に、映像メディアに巣立って行く。入学センターが発行する2021年の入試向けパンフレットに、日テレアックスオンに入社した中込正哉さん(2020年3月卒業)のインタビュー企画が掲載予定だが、民放キー局系列の会社やATP加盟のテレビ番組制作会社に入社するゼミ生が多く、第一線のプロフェッショナルとして活躍している竹林ゼミのOB、OGも少なくない。

メジャーリーグ開催期間中は米国に滞在し、NHK総合やBS1での試合中継やエンジエルスの大谷翔平選手の取材等を行っている関峻也ディレクター(2014年3月卒業)。『ネプ&イモトの世界番付』(日本テレビ)で多くの海外ロケ企画の演出を行い、そして現在は、『ニノさん』(日本テレビ)を担当する中村望美ディレクター(2013年3月卒業、シオン所属)。日曜日夜8時台の『バナナマンもせっかくグルメ!!』(TBS)を担当する源川友規ディ

レクター(2014年3月卒業、ハウフルス所属)等、ゴールデン枠の番組の演出を担当するゼミ出身者も少なくない。『Nスタ』(TBS)の小川晶子ディレクター(2013年3月卒業、ミントプロジェクト所属)や『シューイチ』(日本テレビ)の楠木理紗ディレクター(2016年3月卒業、えすと所属)のように、情報・報道系番組の担当者のなかには、番組に出演し、レポートも行うディレクターもいる。また、最近の傾向としては、キー局の技術系関連会社に入社し、カメラマン、音声マン、編集マン等の映像技術者として活躍するゼミ出身者も増えている。

### 4. インターネットとの融合で進化する映像メディアも視野に

近年、「若者のテレビ離れ」が懸念され、テレビは、先行きが不安な業界だと思われがちだが、実際は、IT技術の進化はテレビを中心とする映像メディアの未来を拓くものもある。インターネットに取って代わられるのではなく、インターネットとのコラボレーションを進化させていくことで、これまでのテレビの概念を超えたコミュニケーションメディアとして、より視聴者に近づいていくだろう。

プロフェッショナルとして活躍するゼミのOB、OGからも担当業務がインターネットにシフトしていることを耳にするようになったが、本学で培った独創性に軸足をおいた映像表現力は、インターネットのフロンティアを開拓する上でも活用されることを信じて疑わない。映像メディアを取り巻く状況がどのように変化しようが、最後に残るのは、独創性に溢れたクオリティの高い映像コンテンツを制作できる表現者なのだから。

